日本学術会議　第26期
記者会見（令和7年11月27日）
資料1-2

日本学術会議
2025年11月27日

研究の活性化へ向けた
研究評価の具体的な改善方策

日本学術会議　研究評価分科会＿第26期委員長
名古屋大学・大学院医学系研究科
精神疾患病態解明学
：尾崎紀夫

研究評価分科会＿第26期委員構成

作成WGメンバー

	氏　名	所　属・職　名	備　考
	坂田　省吾	新潟医療福祉大学心理・福祉学部心理健康学科教授	第一部会員
	城山　英明	東京大学大学院法学政治学研究科教授	第一部会員
	竹沢　泰子	関西外語大学国際文化研究所所長	第一部会員
	三成　賢次	一般財団法人阪大微生物病研究会監事	第一部会員
	岡村　康司	大阪大学大学院医学系研究科教授	第二部会員
委員長	尾崎　紀夫	名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学特任教授	第二部会員・部長
	後藤　由季子	東京大学大学院薬学系研究科分子生物学教室教授	第二部会員
	森　和俊	京都大学高等研究院特別教授	第二部会員
	熊谷晋一郎	東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野教授	第二部会員
幹事	柚崎　通介	慶應義塾大学医学部教授	第二部会員
	大橋　弘美	古河電機工業株式会社シニアフェロー	第三部会員
副委員長	関谷　毅	大阪大学産業科学研究所教授	第三部会員・幹事
	髙柳　大	味の素株式会社理事／バイオ・ファイン研究マテリアル＆テクノロジーソリューション研究所長	第三部会員
	標葉　隆馬	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科准教授	連携会員
	戸田山　和久	大学改革支援・学位授与機構教授	連携会員
	林　和弘	文部科学省科学技術・学術政策研究所データ解析政策研究室長	連携会員
幹事	林　隆之	政策研究大学院大学教授	連携会員
	佐々木　結	京都大学学術研究展開センター特定専門業務職員（URA）	連携会員（特任）
	新澤　裕子	東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室高度学術専門職員（URA）	連携会員（特任）

現状の課題：研究活動の萎縮を招く構造的な問題

- **定量的指標への過度な偏重**
  - ジャーナル・インパクトファクター（JIF）や論文数などへの過度な依存
  - **研究の意義**や教育・社会貢献といった**質的側面が評価から漏れる**
- **研究活動の萎縮と多様性の欠如：自由な発想や挑戦を阻害**
  - 大学世界ランキングへの対応圧力がある一方、定量的指標からの脱却も求められるという**相反する要請に直面**
  - 国レベルの**マクロな指標が研究者個人の評価**にそのまま適用

研究評価の国際的な潮流

- 2013年のサンフランシスコ宣言（**DORA**）を契機に国際的進展⇒**採用・昇進・助成におけるJIF等の量的指標への過度な依存を見直す**
- 2022年7月 「責任ある研究評価（Responsible Research Assessment: **RRA**）」という共通概念の下で議論⇒**多様な研究成果（データ、ソフトウェア、社会的貢献など）を適切に評価し、透明性と説明責任の確保**
- 「研究評価推進連合（CoARA：Coalition for Advancing Research Assessment）」_ **RRA実装を支える**国際的な連携体制

JIF等の定量的指標依存からの脱却や質的評価の重視などを掲げ、理念から実装フェーズへの移行

世界潮流と日本の現状：理念から「実装」への壁

- **具体的な実装手法が明確ではないため、運用段階で停滞**
- **定量的指標への固執**
  - 定量的指標の利用や説明責任を過度に重視する傾向があり、**数値目標への固執が研究現場の萎縮を招く**要因となることが指摘
- **実装の障害**
  - 「何のために評価改革を進める必要があるのか」という**問題意識が研究現場に十分に共有されていない**
- **機運の高まり**
  - 2023年以降、東京大学、科学技術振興機構、理化学研究所、量子科学技術研究開発機構などがDORAに署名するなど、**理念から実装へ向けた機運**

今後は、定量的指標偏重による表層的評価、社会実装との乖離、産業界との連携の不足といった具体的課題の可視化と、実装計画の整備を並行して進めることが重要

提言の目的：評価を「研究活動の質を高める動機づけの仕組み」へ

- **国際的な潮流と日本の研究力停滞の現状を踏まえ、研究者個人および研究プロジェクトの評価の在り方を見直し、具体的な改善策を提示**
- **評価方法の転換: 単なるパフォーマンス測定(受動的)から「研究活動の質を高める動機づけの仕組み」へ：**研究者の価値観や行動規範を含む**研究文化そのものの変革**
- **研究力の再定義:** 論文数・被引用数といった一面的な指標から、研究の質・学術的貢献・社会経済的波及効果を含む**多面的・包摂的な概念**へ
- **目指す姿:** 研究者の**自由な発想と挑戦**を可能とする環境の再構築

日本の研究の持続的発展と国際競争力の強化を企図

評価は研究を測定するツールではなく、研究を育成する文化へ

以上を踏まえた提言

- 定量的指標偏重、形骸化、社会実装との乖離といった日本の研究評価制度が抱える構造的課題を克服し、**研究文化の変革と、研究活動の質を高めるための抜本的な改革**を提案
- **理念の共有（研究文化変革の土台）**
  - 提言１: 研究評価改革の理念を学術界と政府・資金配分機関などの間で共有
- **具体的方策と基盤整備(多様な貢献の評価)**
  - 提言２: 定性的な評価を重視する方法を推進し、評価の質や水準を高める
  - 提言３: 研究者の多様な役割と実績を褒賞し、意欲と能力を高める評価制度を整備
  - 提言４: 研究の社会的インパクトと協働（エンゲージメント）を促進する評価を構築
  - 提言５: オープンサイエンスを促進する評価指標と研究情報基盤を整備
- **制度の検証と進化（持続的な改革プロセス）**
  - 提言６: 評価制度改革に向けた実験的導入と検証を支援する制度を創設

提言１：研究評価改革の理念をを学術界と政府・資金配分機関などの間で共有する（文化変革の土台）

- **目的：外発的要請から内発的な文化変容へ**
  - 改革を単なる「制度的な調整」に留めず、研究文化全体を変革する営みとして位置づける
  - 研究力強化と国際通用性の確保を視野に入れる
- **求められる行動**
  - **継続的な共通理解の醸成:**
    - 研究者、大学・研究機関、資金配分機関、行政、社会の**多様な関係者間で理念を共有**
  - **双方向的な対話の場の強化:**
    - 評価者研修やワークショップを通じた、目的と手法への理解促進
  - **学術コミュニティの主体的関与:**
    - 評価基準や評価方法を含む評価枠組みの在り方を**主体的に検討・提案**し、制度化を推進

提言２：定性的な評価を重視する方法を推進し、評価の質や水準を高める

- **課題：従来の定量的指標依存からの転換**
  - 定量的指標（論文数、JIFなど）依存を脱却し、**定性評価へ移行**
- **具体的な方策**
  - **ナラティブCVの導入:**
    - 研究者の多様な貢献や業績の意義を記述形式で評価する手法の検討・導入
  - **ピアレビューの高度化（資金配分機関）：**
    - **審査体制の強化**（評価者育成、審査時間の確保）
    - 海外事例に倣い、**熟議に基づく建設的なフィードバック**を返す方式へ移行（パイロット導入→検証）
  - **人事・昇進審査の多面化（大学）：**
    - 過去の業績量でなく、**研究計画の将来性、ナラティブな業績説明**を重視
    - 複数の研究者による推薦書を基にした多面的評価の整備

提言３：研究者の多様な役割と実績を褒賞し、意欲と能力を高める評価制度を整備する

- **背景：研究業績偏重の構造的課題**
  - 研究者の教育、臨床、社会貢献、組織運営といった多様な役割が正当に評価されていない
- **求められる転換**
  - **教員評価制度の転換**:
    - 個人の強みと多様な貢献を総合的に捉え、**期待される役割・職務に応じた評価基準**に基づく制度へ
  - **若手研究者への支援と評価:**
    - **キャリアビジョンの明確化**とその実現を支援する仕組みの整備
    - 同世代・異分野の研究者が刺激を与え合う**形成的評価**を通じて育成を推進
    - **「育成ツール」としての評価機能を最大化**し、若手の創造性と挑戦性を確保

提言４：研究の社会的インパクトと協働（エンゲージメント）を促進する評価を構築する

- **目的：成果の多方面化と公共的価値の最大化**
  - 研究成果を学術的貢献に留めず、社会課題解決、政策形成、社会実装など多方面に展開
- **評価の重点領域**
  - **産業界へのインパクト評価の強化:**
    - 量的実績（特許数、共同研究件数）だけでなく、**社会課題との関連性、共創、公共的基盤構築**といった観点からの**定性的評価を強化**
  - **エンゲージメント（協働）の促進:**
    - **事後的なインパクト評価だけでなく**、研究の立案・実施・評価の各段階における**ユーザーやステークホルダーの共創**（研究への患者・市民参画（PPI）、研究者と地域社会のステークホルダーが協働するコミュニティ基盤参加型研究（CBPR）など）を通じた**エンゲージメントの評価を促進**

提言５：オープンサイエンスを促進する評価指標と研究情報基盤を整備する

- **オープンサイエンスの進展に伴う評価の変革**
  - **評価対象の拡大:**
    - 新たな出版モデル（Publish–Review–Curate）に対応
    - オープンデータ、ソフトウェア公開、プレプリントなど、論文以外の多様な成果を正当に評価する指標の整備
  - **研究情報基盤の整備:**
    - 商用データベースに依存しないオープンな研究情報基盤の構築
    - 国内外での相互運用性を確保し、透明性・公平性の高い評価環境を整備
    - 多様な研究貢献を可視化・承認できる持続可能な学術基盤を形成

提言６：評価制度改革に向けた実験的導入と検証を支援する制度を創設する

- **評価の設計自体に科学的思考を適用**
  - **新規性の高い手法の実験的導入:**
    - 資金配分機関は、準ランダム配分（ロッタリー・ファンディング）やAIによる審査支援など、新規性の高い手法を試行的に導入し、その**効果や影響を検証**すべき
  - **検証サイクルの徹底:**
    - 実験的導入は、柔軟な制度設計と検証サイクルを伴うことを前提とする
    - 効果を確認した上で修正していくプロセスを継続

注意点

•これらの実験的手法は、**本質的な解決(研究費総額の拡充と評価体制の強化)の代替ではなく**、補完的な方策

•評価制度の設計や評価者育成、データ基盤整備を通じた関係者の能力向上が不可欠

研究力の評価改革を通じて、研究の自由と責任が両立し、多様性と包摂性に富んだ持続可能な研究環境を実現し、日本の研究力の再定義と強化を目指す